

		音 楽 研 究 会		部 会 記 録	
日時	平成30年 5月 9日(水) 15:30~16:45				
部会名	研修部 授業実践部会			主任	今泉 美保
参加数	40名(実践部会36名、管楽器5名)	司会	岩本 育代	記録	須田 直之
研 修 内 容	<p>二部会合同【歌唱指導研修】模擬授業を通して 講師：並木第一小学校副校長 松崎 由里子 先生 場所：横浜市立桜岡小学校 提案：横浜市立洋光台第一小学校 森野 淳 先生</p>				
	<p>○提案は、第2時のもの。第1時では、「とんびってどんな鳥？」と、鳥のイメージをもった。 ・拡大楽譜を見ながら、「何か気づいたことはない？」と発問し、子どもの気づきを吸い上げた。 ・グループ活動で、伴奏ができるようにiPadに伴奏のデータを入れて配布をした。</p> <p>○参加者の皆さんとの活動／発表場面 ・3つのグループに分かれて、5分ほど活動。「ピンヨロー」の部分の強弱をグループで話し合い、歌って発表を行う。 →強弱の付け方について誰が話すかを決めておいて、全員前に出て歌を発表する。 A グループ：高い音は、遠い音ということで、高いピンヨローは弱く、低いピンヨローは強く。 B グループ：気の強い鳥など、いろいろ居る設定で、強く、弱く、強く、弱く。 C グループ：1羽のトンビで、山にこだまが返って、mf mp f mp。 →このあと、面白かったグループの強弱を全体で共有して、ピアノの周りにてみんなで歌う。</p> <p>○松崎先生より【歌の学習の場づくりのために】 ・フレーズを感じるためには、音から感じ取ってほしい、そのために、教師がどんな支援をするか。 ・子ども達が、強弱の工夫をしたくなるような学習の手立ては、何かないものか。 →そのためには、既習の曲を用いて、強弱の工夫をしたくなるようにすること。 →例えば、「ふじ山」の曲の山を思い出したり、3年生で歌った「春の小川」を再度取り上げたりして、フレーズ感を「言葉ではなく、音で感じ取れるようにする」こと。</p> <p>○松崎先生より【今回の提案について】 ・聴きながら思ったことは、グループの中で、ソロパートが生まれてもよかったのではないということ。 ・教師が「こうしなさい、ああしなさい」ではなく、子どもが「こうしたい」という思いや意図をどう実現するかが、教師の仕事。 ・交互唱を歌うとき、教師「とべとべとんび」子ども「そらたかく」など、歌いながらフレーズ感を学べるようにするとよい。フレーズとフレーズのかかわりを大切に感じ取らせたい。 ・範唱を聴きながら、拍打ちしながら「ここをこうしたい」と思いや意図をもつことができるようになるといい。 ・グループみんなで共有するためには、掲示楽譜がグループに一枚あると共有しやすいと思う。 →悩むのは楽譜のサイズ感。 ・何のためにグループにするのか、教師が指導の意図を明確にしておくことが大切。子ども達が、思いや意図を伝える時に、グループが少人数だと思いを伝えやすい。 ・「ピンヨロー」の部分だけを発表させていたが、曲全体を通して聴くことで、強弱を工夫する良さを感じ取ることができるのではないか。</p>				

- ・「とんび」の強弱の変化は、情景を想像して、様々な工夫ができる。よい教材だと思う。

○松崎先生より【その他、学習について】

- ・伴奏を聴きながら、リズム打ちをする。唱歌は、リズムが曲の中で似ている曲が多い。段ごとに一人ずつ叩いてもらって、同時に鳴らすなどの活動を通して、楽曲の構造を理解することができる。
- ・評価については、普段から一人ひとりの声を子どもの間を回って聴き取りたい。そして、歌っているときにたくさん褒めてあげること。

→そのためには、褒め言葉をたくさんもっていること。

→例えば、一人ひとりが短いフレーズを歌いつなぐなどの活動を取り入れることで、子ども同士でも、自分の声の特徴に気づいたり、友達の声のよさを聴き取ったりすることができる。